

① 私は戦争体験者

村山 優子 91歳

令和6年12月10日夜、NHKテレビで放送された「保阪正康の最後の講義（いま戦争を語らなきゃいけない）」は同感です。

今では戦争体験者は少しの人間になりました。戦争を知らない人達に「戦争は絶対してはダメ」という事を伝えなければ時間がありません。

日本はどうして愚かな戦争を仕掛けたのか不思議です。ナチスの行為を「狂気実行」と言っていますが日本とて同じです。多くの人が、親、夫、兄弟、恋人といった愛する人との仲を引き裂かれ、彼等が戦死すると、お国のため、名誉の戦死と讃えられました。残された家族の人はと思うと辛いです。息子を持っている私は恐ろしいです。

当時の多くの学生も無理矢理戦争に狩り出されました。の中には「この戦争は間違っている」と思った人もいたでしょうに……。しかし、声に出せば憲兵に連行され、殴る蹴るのひどいめにあわされる時勢でしたから、逆らえなかったのでしょう。

私の戦争体験は台湾でした。引き揚げ者です。日本本土の戦況と違っていたかもしれませんが、戦争の恐ろしさは同じだと思います。

日本がハワイを攻撃したのを、皮切りに第2次世界大戦が始まりました。その時、私は台湾の国民学校の1年生でした（父母は父の仕事の関係で台湾へ渡り、私はそこで生まれました）。初めのうちは「勝った勝った」と提灯行列をして喜んでいましたが、その後の状況の悪化はずっと知らされませんでした。家の近くに特攻隊の飛行場[※]があり、近くの日本人の家には2、3人の予科練生が下宿していました。私の家にも2人が出入りしていました。多分、17、8の青年だったと思います。「お兄ちゃん お兄ちゃん」と呼んで遊んで貰いました。滞在期間は覚えていませんが、その後、戦死したと思います。

鹿児島県の知覧町には同じ年代の人の遺書が展示されています。遺書を書く時はどんな気持ちだったのか、辛いです。

残っている者は、国（台湾）を守らなければなりません。それを「銃後の守り」と言いました。夜、敵の飛行機に見つからないように電球に黒い布を被せたり、窓のガラスが割れないように紙のテープを×点に貼ったり、火を消す訓練は小さなバケツに水を入れて次々に消すバケツリレーでした。他にも、チャーチル（英国）、ルーズベルト（米国）のわら人形をめがけて竹槍で突くという訓練もさせられました。このような粗末なものが国の方針だったのです。滑稽としか言いようがありません。

防空座布^{ざふ}には、小さい布に住所、氏名、親の名前、血液型を書いて縫いつけて肌身離さず持っていました。いつ攻められるか分からないので、同じ洋服を着て身構えていました。

父は台湾で赤紙招集、千人針のタオルを持って出征しました。戦争が熾烈になり、私たちは（台湾の）山奥へ疎開（逃げる）しなければならなくなりました。疎開する時も突然山間から敵機が現れるというとても恐い目にあいました。

延々と4年つづいた戦争は昭和20年8月15日で終わりました。それからは日本人は殺されるという噂が飛び交い、慌てて翌昭和21年3月末に着の身着のままで日本に戻り

ました。

折角苦勞して日本に帰ってきたのに、帰ってきてすぐに父は病気になり、食べるものもなく薬もなく、肺病で 42 才で亡くなりました。その 2 年後には「パス」と「ストレプトマイシン」という肺の薬ができ、今では結核で亡くなる人は殆どいないようです。

残された 3 人の子供（6 年生、3 年生、2 才）は、みんな母が育ててくれました。すごい苦勞だったと思います。いくら感謝しても足りません。書き進めていると母をしきりに思い出します。

25 年前、夫とハワイに旅行に行きました。（夫は 20 年前に亡くなりました）その時、真珠湾にも行きましたが、この時はほんとうに日本人として恥ずかしく、済まない気持ちでいっぱいになりました。

世界のあっちこっちで争っている国があります。その国の指導者が考えを改めて世界が平和になりますように祈っています。

※台湾にも特攻隊の出撃基地がいくつか存在しました。特攻作戦は主に南九州の基地から行われましたが、台湾にもギーラン宜蘭、フェリエン花蓮、バングアン澎湖諸島の望安などに旧日本軍の飛行場跡や関連施設が残っており、特攻隊員たちの出撃や壮行の場となりました。